



L20のロゴマーク

開会挨拶は、厚生労働省高階副大臣、連合神津会長、経団連岡本副会長。基調講演は、ILO本部のデボラ・グリーンフィールド政策担当事務局次長とILO仕事の未来世界委員会の清家委員。続くセッションで報告された情報労連春川政策局長の勤務間インターバルの積極的な推進状況、全労金深見書記長の先進的な嘱託等労働者の処遇改善

2月1日。厚生労働省とILOが主催、経団連と連合が後援し、ILO創設100周年記念シンポジウムが東京で開催された。テーマは「仕事の未来」。

「輝かしい未来と仕事」報告書 どう活かす、

ボーザ大統領とスウェーデンのロフベン首相。お二人とも労働組合のリーダーとしても活躍されました。以前、私が直接伺ったロフベン首相の語り口は物静かで、同時に、強い意志を感じさせる姿が印象的でした。そもそも、イニシアチブをスタートさせたILOガイ・ライダー事務局自身、前ITUC（国際労働組合総連合）書記長ですが、委員には、UNICEFグローバルユニオンのフィリップ・ジェニングス書記長（当時）、清家篤前慶義塾長はじめ、その知見と実績を説明する必要のない22名で構成されました。労働、学識、経営、行政など様々なバックグラウンドの持ち主がその英知を傾けた報告書と受け止めたと思います。

相原事務局長の

ナチュラル

Natural Note

のーと

vol.
4

「未来のミライ」と「仕事の未来」

子どもたちの笑い声をひろげる

細田守監督作品の『未来のミライ』。アニメ界のアカデミー賞と言われる第46回アニ賞ですが、ロサンゼルスで行われた授賞式で長編インデペンデントアニメ部門作品賞を受賞。日本人監督初の快挙と一斉に報じられました。「自分の子どもにも評判が良かった」とは、細田監督の弁。子どもたちの視線を通して描き出される美しい映像に思わず引き込まれた方々も多いことでしょう。私もその一人です。

子どもたちの笑い声が響く何気ない日常。ただし、家庭で、学校で、そして地域で、この当たり前を確立することに困難を伴うのが今の日本社会の一つの現実です。このごく当たり前をひろげることを躊躇う人はいないはず。私たちに出来ることは何でしょう。私は、健康で安全に働く日々の姿を日本の隅々にひろげることが、健全な社会の基礎と考えます。子どもたちの笑い声をひろげる。私たちへの期待は小さくありません。

もう一つの未来

第一次世界大戦終結の翌年に設立されたILO（国際労働機関）は本年、設立100年を迎えます。融和の精神、国際主義によるILOの理念は、悲惨な戦争に対する反省から生まれました。そして今、私たちは、「仕事の未来」を構想する重要な局面に

は、いずれも課題から逃げない両組織の姿と努力が滲むものとなりました。そして、田口ILO駐日代表の挨拶で閉会となりました。

一方、私もパネリストとして参加したパネルディスカッションでは、働き方改革を念頭に慶應義塾大学大学院の鶴光太郎教授のモデレーターのもと長時間労働、非正規雇用、高齢者の働き方などについて、幅広く議論しました。私が力を込めたのは、今回の報告書は、仕事の未来の理想像と現実の働き方の両面を行き来し得る価値ある提起という点でした。ものごとの理念や理想を論じることが、時に、抽象的で具体性に欠けるとの批評を受けることがあります。一方、個別の戦術だけを語れば立ち戻る先を見失いかねません。私たちは報告書を活かさねばなりません。

本年日本はG20の議長国。あわせてL20が開催されます。私たちはあらゆる機会を通じて仕事の未来を構想する「社会対話」を重ねていきます。その意味で、今回の公労使三者構成のシンポジウムは、貴重な第一歩となりました。

壁を作るのか、壁を壊すのか。

連合が結成された1989年は、ベルリンの壁が崩壊した年。冷戦が終わりをみたと歴史の転換点として、深く世界の人々の記憶に刻まれることとなりました。一方、東京大学教授（現Rengoアカデミー教務委員長、

立っています。それは、技術革新、人口動態、気候変動、グローバル化など、私たちの仕事の未来を決定づける様々な要因とその変化が明らかとなっているからです。

平成の時代が終わろうとしています。もちろん、元号をひとつの単位として時代の移り変わりを合理的に説明できるとも限りません。しかし、一つの時代を締めくくりに、新たな時代を迎えるにあたり、組織も一人ひとりもこの30年間に何を学んだのか振り返ることは意味があります。何故なら、私たちが引き寄せるべきより良き未来は、人が主役であり、そこには、働く人の気持ちに欠かせないと思うからです。

結成30周年を迎える連合。今を生きる私たちはもちろん、「未来のミライ」に向けて、「私たちが未来をつくる」というメッセージは共感を得るはずです。またそうしなければなりません。私たちは、意義ある節目を迎えています。

「ILO仕事の未来世界委員会報告書」

ILOは、2013年に「仕事の未来100周年記念イニシアチブ」をスタートさせました。そしてこの度、その成果が世界にもたらされました。1月22日に発表されたILO仕事の未来世界委員会報告書は「WORK FOR A BRIGHTER FUTURE: 輝かしい未来と仕事」と名づけられました。委員会の共同議長は、南アフリカのラマ

連帯社会研究交流センター長の中村圭介先生が、『壁を壊す』を出版したのは、今から丁度10年前の2009年。連合結成20周年の年でした。正規雇用と非正規雇用の格差など、壁を壊す意義を提起されました。

一方、この間の技術革新は、人々がつながり合える新たなデジタル空間を人類に提供しました。しかし、米国ではメキシコとの国境を隔てる壁建設が大きな政治問題となっていました。国、地域、民族、宗教などが人々を隔てる要素としてクロズアップされる国際社会、国際政治の現状を強く懸念します。同時に、自由で民主的であること、多国間主義が尊重されること、当然視されてきたこれまでの世界の価値観が、その輝きを失う時代背景も憂慮せずにはいられません。産業発展、社会開発を支えたのは、紛れもなく世界の働く人々であり、結果としての民主主義の拡がりを世界は享受してきました。世界に広がる格差は、人々の他者に対する信頼を低下させます。自分を守ることに汲々とせざるを得ない不健康な社会の姿といえます。そして、技術革新とグローバル化にはもうこりこりだと遠ざけるだけでは日本の将来に灯りをともしこことは出来ません。壁を作るのか、壊すのか、その答えは、私たち働く者からの発信と今後の行動にかかっています。「仕事の未来」を構想することは、単に仕事の未来を想像することにとどまらないのです。